

Title	卵巣ガンをどう克服するかが今一番難しい問題である
Author(s)	奥平, 吉雄
Citation	癌と人. 23 P.23-P.26
Issue Date	1996-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/23900
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

卵巣ガンをどう克服するかが 今一番難しい問題である

奥平吉雄*

近年、おそらくこの病院でも同じような事情にあると思いますが、婦人科病棟の中で卵巣ガンの患者さんの占める比率がしだいに増加しつつあります。そしてこのような患者さんに共通することは入院日数が総じて長期にわたることが多いということです。これは後にもふれますが治療法として手術は勿論のこと抗ガン剤治療が主体となる患者さんが多い（すなわち発見時には既にかなり進行した状態にある）ことが入院の長期化につながるといえましょう。

そこで今回は卵巣ガンについて、この病気のあらましと診察、治療、特に抗ガン剤による治療などにふれてみたいと思います。

卵巣ガンとは

婦人科の本の中に、日本産科婦人科学会が統一した見解を示した“卵巣腫瘍取扱規約”と題した本がありますが、それを参考に致しますと、卵巣には良性、悪性を含めきわめて多種類の腫瘍が発生します。この腫瘍という言葉の中には①良性のもの、②良性悪性不詳のもの、そして③悪性腫瘍が総括されており、今回の話題である卵巣ガンは当然悪性腫瘍のグループに入ります。そして少し複雑になりますが、悪性の中で最も頻度の高いものが原発性上皮性卵巣ガンと呼ばれるものであり、一般に卵巣ガンといえばふつうこれを指します。この原発性というのは卵巣自身から発生したことを示し、これに対して転移性卵巣ガンと呼ばれるものは他臓器に発生した癌（例えば胃ガン、大腸ガン、膀胱

ガンなど）が卵巣に転移したものを指します。また卵巣腫瘍は嚢状を示す卵巣嚢腫と固形状を示す充実性卵巣腫瘍に分けることができますが、悪性のもは充実性卵巣腫瘍に多くみられます。充実性のうち前述の①良性腫瘍は15%、②良性悪性不詳は15%強、③悪性は実に69%を占めております。一方嚢腫の形をとるものの悪性率は約15%前後となっております。

頻度の高い卵巣ガンと発生年齢

卵巣ガンの60~70%はこの上皮性腫瘍に属するものです。その主たるものとして漿液性卵巣癌、粘液性卵巣癌、類内膜性卵巣癌などをあげることができます。多少複雑な表になりますが、上皮性腫瘍の種類を表1に示しました。

悪性卵巣腫瘍は高年齢者に多く発生する傾向があります。最も多い上皮性卵巣腫瘍の悪性率はやはり年齢とともに増加し、60才代には卵巣腫瘍と診断されたうち約3分の1が癌であるといわれております。ちなみに統計上では50才代をピークとして40才から70才が好発年齢と報告されています。

20才以下の若い人でも悪性卵巣腫瘍はみられますが、これは特殊なタイプのものが多く、例えば未分化胚細胞腫とか、卵黄嚢腫瘍をあげることができますが、いずれも卵巣腫瘍全体の1~3%ときわめて低い頻度を示しております。

この卵巣悪性腫瘍は女性性器癌の中では今日きわめて重要な位置を占め、年々発生頻度は増加し続けており、米国では卵巣ガンによる推

* 大阪癌研究会評議員、大阪大学医学部産婦人科助教授

表1 卵巣腫瘍の分類

	良性腫瘍	悪性腫瘍
表層上皮性・間質性腫瘍	漿液性嚢胞腺腫 粘液性嚢胞腺腫 類内膜腺腫 明細胞腺腫 腺線維腫（上記の各型） 表在性乳頭腫 ブレンナー腫瘍	漿液性（嚢胞）腺癌 粘液性（嚢胞）腺癌 類内膜腺癌 明細胞腺癌 腺癌線維腫（上記の各型） 腺肉腫 中胚葉性混合腫瘍 〔ミューラー管混合腫瘍〕 〔癌肉腫〕 悪性ブレンナー腫瘍 移行上皮癌 未分化癌

定死亡数は子宮頸ガン、子宮体ガンを上回り第1位となっております。日本では幸い人口10万人当たりの卵巣ガンの頻度は米国に比し5分の1くらいと低いのですが、増加傾向をたどっていることは間違いありません。

近年子宮ガンに関してはその診断面あるいは治療面に関して著しい進歩を示しておりますが、これには老人健康法の適用など検診システムの完備とともに検査料金の国公負担による早期発見の努力に負うところが多分にあります。一方卵巣ガンに関しては、治療面で漸次改善されつつありますが、治療結果に今一つ著しい改善がみられないというのが現状であります。これは卵巣の存在する場所が早期発見、早期治療を原則とする癌の発見にとって不利な条件となり、卵巣ガンと診断がついて手術を行った時は既にその3分の2が手術による全摘出が困難な状態になってしまっているという事実があります。さらに各種の癌はきわめて複雑な病態を示し、ひとくちに卵巣ガンといっても実にさまざまな経過、転帰をたどるため、ひとからげに論ずることにはほとんど不可能といっても過言ではありません。

卵巣ガンの自覚症状

卵巣ガンの発見が遅れる一つの理由として、このガンはほとんど無症状のまま進行していくということがあります。腹部膨隆がある、慢性の下腹部痛がある、閉経後出血をみる、急激な下腹部痛を生ずることがあるなど漠然とした消化器症状に類するものが最も多い自覚症状とされています。しかし実際はこのような症状や所見は初期症状とは言い難く、この時点で開腹してみるとすでに進行している場合が高い率で見られます。この無症状期間の進行が、卵巣ガンの治癒率の低さにつながるということになります。しかし癌が卵巣にのみ限られて発見された場合ですら5年生存率からみると60%前後にとどまり、癌の進行度とともにその癌を構築する細胞の種類によっても進行の速さ、悪性の度合いが違ってくるといようなやっかいな面もあります。

このような点から卵巣ガンの症状、特に早期の症状とは何かということになるとはなはだ漠然としたものになってしまいます。これまでの経験から述べてみますと婦人科診察を行った際に骨盤内に塊（腫瘍）がみつければそれが閉経後の婦人、または初潮前の少女であれば悪性を

疑ってかからねばならないということであり
ます。

卵巣ガンを発見するには

極端な表現かも知れませんが、現在のところ
子宮ガンの場合のようなすぐれた検診方法は卵
巣ガンでは確立されておりません。ただ老人健
康法による子宮ガンの検診の際には婦人科内診
を行うことが記されており。その際、触診
で子宮近傍に塊を触れれば引き続き精密検査へ
と進むこととなりますから、やはり定期的な
チェックが必要であることに変わりはありません。
また前述のように異様な腹部の膨隆は腹水の
存在を示す一徴候です。卵巣ガンの場合、こ
の腹水の存在がしばみられますから注意が
必要です。しかし、腹水で腹部が張るような状
態の時にはすでに早期を過ぎてしまっている場
合が多いことも事実です。

この下腹部が張る状態を単に脂肪がついたた
めと考えてしまわれる方も時々あります。自己
診断は難しいことが多いのですが、両膝を立て
仰向けに寝て腹筋の力をぬきながら、お臍の下
方を指先で軽く押すように丁寧に触ってみて下
さい。もしなにかしこりが触れるようでしたら
迷わず医師の診察をお受け下さい。自分でしこ
りを触れるような場合、その塊はすでに握り拳
くらいの大きさにあると考えてよいでしょう。

乳ガンの場合にも自己診察といわれる方法が
あります。それは乳ガンが皮膚の表面に近い場
所にできるからこそ小さなものでも見つけやす
いというわけです。一方、卵巣ガンは腹腔内に
できますので、テニスボール程度の大きさでは
自分で触ることは不可能です。子宮ガン検診の
必要性がかなりよく理解され、しだいに浸透し
てきたことはよいことですが、卵巣ガン検診に
関してはまだまだ充分というわけにはいきませ
んし、老人健康法に基づく検診対象の中にも含
まれておりません。この点に関しては現在卵巣
癌検診というテーマで作業が進められていると

ころです。

卵巣腫瘍の診断法

卵巣ガンを含めた卵巣腫瘍の診断法として現
在よく行われてる方法について簡単に触れてお
きます。

まず先ほど述べました子宮ガン検診の際に行
う婦人科内診が、卵巣腫瘍早期発見の診断法と
して最も簡単で有用な方法であり、これは不可
欠の診察法でしょう。特に高齢の婦人は内診を
嫌われる向きがありますが、卵巣ガンの年令分
布からも、50才を越えた方はぜひ内診を受けら
れるようお勧めします。

そのほかに理学的検査法というのがいくつか
ありますが、最も軽便なのがいわゆる超音波断
層法と呼ばれているもので、これはお腹の上か
ら視るものと腔内に器具を入れて視る二つの方
法があります。この超音波機器は開業されてい
る医院を含めほぼこの施設にもあり、内科の
診察で下腹部の超音波検査をしたところ卵巣の
腫瘍が見つかったからと婦人科に紹介されると
いった場合もあります。そのほか、一般にCT
と呼ばれるコンピューター断層撮影、MRIと呼
ばれる磁気共鳴映像法、腹腔鏡による診断法な
どがあります。

一方、腫瘍から血液中にはいった特殊な物質
(これを腫瘍マーカーといいます)を検出する
方法がありますが、これだけで卵巣ガンをすべ
て拾い上げることは不可能で、診断のための補
助的な手段と考えるとよいでしょう。卵巣ガン
と関係のある腫瘍マーカーとして、頻度の高い
ものにCA-125、CA-19-9、CEA、AFP(若年
女性にみられる胎芽性癌の際に陽性となります
)をあげることができますが、詳細については
省略させていただきます。

卵巣ガンの治療

卵巣ガンの治療にはその種類(悪性度を含め
て)、進行の状況、年令、その他の体調、妊娠

などによって大きく異なってきますのでひとまとめに述べるわけにはいきません。

手術による摘出にしてもいろいろなバリエーションがあります。特に進行している場合には必ず制ガン剤治療を併せ行いますが、ここでは制ガン剤としてよく使用されている薬の名前だけをあげるにとどめます。たとえば①プラチナ製剤、②アドリアマイシン、③アルキル化剤、④ビンブラスチン、⑤ビンクリスチン、⑥ブレオマイシンをあげることができます。このうちプラチナ製剤は必ず使用メニューの中に登場します。しかし一方その副作用も強く、特に腎毒性が強いので使用するときは細心の注意が必要

な薬剤です。

おわりに

以上紙面の都合上卵巣ガンに関するポイントだけを書いてみました。卵巣には実に多種類の腫瘍が発生し、それにともない治療の選択にもいろいろな組み合わせが生じてきます。特に卵巣ガンの発見は自覚症状を欠くこと、骨盤腔の中の臓器であるという解剖学的な条件から、どうしても発見が遅れがちになることをよく理解していただいて定期的なチェックを受けられるよう強く望むしだいです。

ガン予防の十二か条

日常生活で実行してみましょう。

- ① いろどり豊かな食卓にして、バランスのとれた栄養をとる。
- ② ワンパターンではありませんか。毎日、変化のある食生活を。
- ③ おいしい物も適量に、食べ過ぎは避け、脂肪をひかえめに。
- ④ 健康的に飲みましょう。お酒はほどほどに。
- ⑤ たばこを少なくする。新しく吸い始めることのないように。
- ⑥ 緑黄色野菜をたっぷり。食べ物から適量のビタミンと繊維質のものを多くとる。
- ⑦ 胃や食道をいたわって、塩辛いものは少なめに、あまり熱いものは冷ましてから。
- ⑧ 突然変異を引きおこします。焦げた部分は避ける。
- ⑨ 食べる前にチェックして、かびの生えたものに注意。
- ⑩ 太陽はいたずらものです。日光に当たり過ぎない。
- ⑪ いい汗流しましょう。適度にスポーツする。
- ⑫ 気分もさわやか。からだを清潔にする。

——国立がんセンター提唱——